

1. 活動のテーマ

<テーマ>

絵本

<テーマ設定理由>

○キッズタウンむかいはら保育園にはクラスの本棚の他に絵本コーナーが3ヶ所があり、特に2階の絵本コーナー（30㎡）には、子どもが自由に好きな絵本を選べる環境を作り『絵本』に力を入れている。

『絵本』を通して興味関心を広げたり、調べたいという探求心、物語からの表現力や情緒など感情について、文字や言葉の獲得など成長には欠かせないツールのため、子ども達の絵本好きをより深めたり、いつでも読みたい絵本コーナーの作製を行う。

○板橋区が『絵本のまちいたばし』として絵本に力を入れており、毎月図書館の読み聞かせや区からの各家庭に赤ちゃん絵本の配布など子ども達は絵本にふれる機会が多く保育園でも開設当初から絵本に力を入れ大切にしてきた。改めて子ども達、職員共に絵本について考える機会にする。

<内容>

○絵本コーナーの環境を子ども達中心に新しくデザインし、より絵本を好きになったり、新しい空間の中でわくわくな発見につなげ、発見を次に生かし良いものに変化を続ける。

○絵本について子ども達一人ひとりやみんなで色々なアプローチで考えたり、共有したり、表現したりしていく中で絵本について深く探求する機会をつくり絵本を通しての心身の成長につなげたり、絵本を読み解き表現や製作等に生かしていく

2. 活動スケジュール

① 絵本をみんなに好きになってもらう・ずっと居たくなる絵本コーナーの空間づくり（7、8、9月）

- ・職員で絵本係を設定し子ども達に読んでほしい絵本の選定、絵考える。
- ・常設絵本交換ポスト『どうぞの絵本』を実施
- ・本を読める場所、子どもの楽しい空間づくりとして玄関の絵本コーナーと2F 絵本コーナーの変更

② 幼児3クラス 好きな絵本や読みたい絵本について話し合い（10月）

- ・自分の好きな絵本を相手に発表する。
- ・保育園に欲しい絵本をみんなで意見を出し合う。
- ・他の友だちに薦めたい本を紹介する。

③ 夢の絵本コーナーの話し合い（11月）

- ・どんな絵本コーナーがいいか、どんなものを置きたいかなど意見を出し合う。

④ 好きな絵本をみんなに知らせよう（12月）

- ・自分の好きな絵本の絵を描いて表現、張り出す。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

朝や夕方の時間を利用して事前に絵本を読む機会を多く作ったり、「好きな絵本を絵で表現してみよう」と子ども達に話をする。

クレヨン、画用紙、お絵描きシート

4. 探究活動の実践

(活動内容)

④ 好きな絵本をみんなに知らせよう 4歳児11月29日(金) 3歳児12月3日(火)

- 自分の好きな絵本の絵をかいて表現、張り出す。
- 描いた絵本を友だちに発表する。

(活動中の子どもの姿、声、子ども同士や保育士とのやり取り)

<4歳児>

好きな絵本をお互いに紹介する機会を作りたいけどどんな紹介にすると子ども達に問いかけると多くの子は「絵本を絵本コーナーから持ってくる」との回答があり、絵本コーナーにない絵本が好きなお友達どうしたらいいかなという問いかけに「じゃー絵で描こうか」と言ってくれた子がいて全員絵で描いてみることになる。好きな絵本を持ってきて表紙と同じように描く子が多かったが中には絵本の一場面を絵にしようとする姿もあり子どもによって捉え方等の違いを感じる。

出来上がった作品は一人ずつ紹介した後掲示板に貼って幼児クラスや保護者にも見えるようにすると行き帰りの時間に親子で見ながら会話に繋がっていた。

<3歳児>

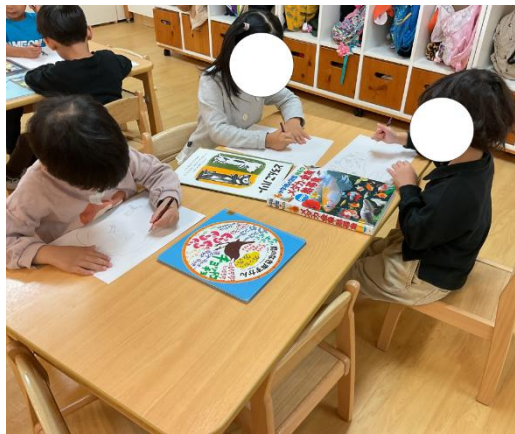
4歳児が絵本の絵を描いているのを多くの子が見ていたので自分たちも描きたいという声が多く実施をする。自分たちの好きな絵本を持って来て描いたのだが、まだ字が読めない、描けない子が多い中絵本の字を真似て書く姿が多く見られこの園で大事にしている絵本からの文字の獲得が見られる一場面だった。

3歳児も同じく張り出すと通る職員や保護者に「みてみて、これ私の絵本」「ぼくの描いた△▼だよ」など紹介してくれる姿が多く見られた。

2クラスの設置場所が廊下と絵本コーナーの掲示板だったので場所によって子どもたちの自分たちの作品に対する反応や対応の違いがあった。

(写真)

☆4歳児



☆3歳児



(振り返り 気づき)

- ・絵本で絵を描いてみようという題材で行い、職員のイメージは表紙を描くのではと思っていたが表紙だけでなく、物語の一場面を描く姿や好きな絵本のキャラクターを描いたり子どもによって絵本を描いてみようというテーマでも様々な捉え方があり発見になった。
- ・作品を見ていた子ども達や保護者の方は絵を見て、何の絵本かわかる姿も多く子ども達のイメージを模写する力があることが分かった。
- ・絵本を見て、真似して描いた子も出来上がった作品は自分の作った作品として他の子や職員に自信を持って「これは……………」と紹介する様子があった。